

「母校」 その懐かしく温かい響き

学校長

過日、大雨の中、本校最後の文化祭である紫苑祭が行われました。

閉会式の挨拶でも触れましたが、受付で記名いただいた方だけでも約300名の方が、紫苑祭並びに閉校記念イベントに華を添えてくださいました。記名は、代表者のみで承っておりまして、ご家族やお子様を連れて来校された方を合わせると、おそらく500名に迫る方に来校いただけたのではと推測しております。生徒数わずか19名の学校に、こんなにも人が集まることはありません。また、遠く県外からいらっしゃった方も数名いらっしゃったとも聞きました。改めてこの場をお借りして感謝申し上げます。

当日の来校者数が全く予想できない中、会場の空席が目立ちすぎてもと用意した100席はすぐに満席となり、予備として取っておいた50席でも足りず、その後さらに50席あまりの追加、最後は職員席を全部取り払ってのてんやわんやの対応でした。そんな中、普段少人数で活動している生徒たちが、想定外の大観衆にも動揺することなく司会に、役割に、演技に落ち着いて取り組んでいた様子は印象的でした。

一番に自分たちの文化祭を盛り上げようと、自由発表に果敢に挑戦してくれた生徒たちの勇気を賞賛しますが、3年生と石名坂お囃子同好会の皆様との和太鼓の聞き比べ、「ふるさと」の全校合唱、第2部の高見澤さん作曲の「天馬行空」の会場の皆様を巻き込んだの合唱等、心を震えさせる感動的な瞬間がいくつもあったと感じましたが、皆様にはどう映ったでしょうか。

お昼の校舎内一般公開は、PTAや卒業生の有志ボランティアの皆様のご協力によって実現した企画でした。約10年前に自身が使っていた楽器との再会に感激していた卒業生、お父さんの中学校に行こうと誘ったのでしょうか「お父さんの写真はないの？」と幼児にせがまれ困惑していた親子など、気づいただけでもいくつもの微笑ましい瞬間に出会えました。懐かしい校舎に足を踏み入れ、どんな感想を抱かれたのか、みなさんの感想を聞かせていただきたかったと思いました。

また、並行して行っておりました平成21年度在校生のタイムカプセル「10年前の私からの手紙」のコーナーでは、当時の在籍数291名のうち97名もの卒業生が来校してくれました。（その後も、同級生からの口伝えで来校される卒業生の姿もあります。）10年後の約束は、実際は15年経ってしまい、年齢も30歳前後で地元を離れた方も多いと思われます。そんな中、これだけの卒業生が集まってくれたことから坂中生の母校愛の深さを感じさせられました。さらに、閉校記念誌の申し込みの方も順調に伸び、当日だけで303部の申し込みがありました。いろいろ欲張った紫苑祭並びに閉校イベントでしたが、スローガン「笑顔満祭」が達成できた、充実した一日になりました。

教室訪問をしていたら、3年生の国語で魯迅の「故郷」を学習していました。「もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」は、多くの人が記憶している印象的な結びだと思えます。何も無いところから78年の時を刻み、伝統を築いてきた坂中生にとっての「母校」。3月末で学校としての役割は終えますが、皆様の心の中に永遠に温かい響きをもって生き続けることでしょう。

